

# ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部  
 ■発行日 　2006年4月30日  
 ■連絡先 　藤川博樹  
 　　　　　〒115-0045  
 　　　　　北区赤羽1-48-3-203  
 　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090  
 ■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

## No.293

### 5月行事日程

#### ■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ  
 ワード・一太郎文書も可  
 kamo@sun.email.ne.jp  
 エッセイ:5枚(2000字)  
 小説:10枚(4000字)目安

#### ■締め切り

5月19日(金)

#### ■年会費

4月になりましたので会費の納入  
 お願いします。  
 1200円(年) 切手80円×15枚  
 郵便振替:東京00170-1-18290



◆アンデルセンの童話、「人魚姫」の像。先年、腕を切断される被害にあったが、これはその前の無事な姿。海峡に臨む岩場にあり、写真を撮るために向こう側に飛び移るのが大変だった。若気の至りである。(デンマーク)

1993年8月

◆山がまるまると笑ってきた。ブナの木の芽吹き。淡いみどり。ひそやかな風の渡り。畑は草ぼうぼう。でも、ほつたらかしのニラはいきいきとして葉柄を伸ばす。さっそく玉子とじ。それにアサツキの味噌汁。ノカンゾウのキムチ。朝はやく目覚め、夜はすぐ眠くなる。「NEWS23」もみられない。

◆昨夕はきのこふらんにんぐの久々の集まり。今年のART収穫祭は9月2日(土)に決まった。場所は芸術の家を離れて、サイレントリバー・キャンプ場になる。概要を話し合っただけだが、いろんなアイデアがでて、なんだかわくわくする催しになりそう。

◆そのまえ、8月に奥多摩の1700mの雄峰へ有志でハナビラタケの採集にいきたい。アプローチがながく、きついので、関心のある方はいまから脚を鍛えておいてください。わたしもこの10年くらい登っていない。果たしてどうなるかでも、こうやって広言しないことには、またぞろなまけて低山徘徊に終始するだろう。

◆ハナビラタケはその画期的な抗癌成分に製薬会社がいちめきたつているキノコである。味もよい。炒めてよし、てんぷらもよし、みそ漬、ぬか漬けよし。

人口栽培もされているけれど、わたしは思うに、あの成分は高山の土壌と冷涼な環境によって形成されるもので、間伐材のおがくずと米ぬかを合わせた人口栽培では姿かたちとはともかく、薬効までは再現できないはず。というわけで、食と長生きに関心のあるひとはいまから準備しておいてください。(雅)

緊急エッセイ

## リハビリ病棟

蒲原 ユミニ

若葉、萌える候となりました。

3月13日のもどり寒波に脑梗塞で倒れた母は、今リハビリに懸命です。

母は左脳をやられたのでしょうか？ 言語と右半身が不自由になりました。倒れてまだ1日目は、わたしたち子どもを見て、「失敗しちゃったよ」と言っていたのですが、2日目から口が思うように動かなくなりました。気はしっかりしているのですが、神経の命令系統がうまく働かず、もごもごになってしまいます。頭の中もぼやつと霞んでいるそうです。

点滴やお粥だったころ、母は気弱になり、「生きていちゃあ迷惑だなあ」と何度かつぶやきました。その度、私や妹が、「こんなに軽くすんだから有難い方なんだよ」と半分怒りながら言い聞かせました。

母が91才のわりに軽くすんだのは、早く救急車に来てもらったことも大きいようです。

母は台所で洗い籠をハイターで漂白中に倒れました。ハイターの液を被り、倒れた時どこかに額をぶつけ、床やカーテンダーに血がこびりついていました。それでも、母は兄の会社に電話したらしく、しかしその電話は会社の人が取って兄につながりませんでした。が、しょっちゅう母に連絡を取っている高崎在住の妹が救急車を手配しました。だから、倒れて30分以内で救急車に運ばれたらしいです。

2週間ちよつとで母の容態が安定し、リハビリ病棟に移りました。

ここは、築3年目でピンク系でまとめられた明るい病棟です。

母は、言語・手・足の3種類、3人の介護福祉士からリハビリを受けることになりました。リハビリは「治りたい」という気持ちが一番のクスリと思い、妹やわたしは「絶対、歩けるようになるからね。暖かくなったら、また畑をやるんだからね」と繰り返しました。畑は母の生きがいなので、わたしは白菜やほうれん草

の種を買ってきて見せると、母の目が嬉しそうに明るくなりました。

母は少しずつやる気を出してきました。リハビリのない土日は、わたしが書いた「五十音表」で発声練習をしたり、書いたりしていました。

隣のベッドの住人はしっかりした物言いの79才の女性です。耳もいし、歩行器で歩けるのに食事以外はリハビリもやらず、淋しい目をしてずっとベッドに寝ています。

どうしてかなあと思っていたら、ある日その娘がやって来ました。かしこそうな、でも、きつい顔ではありません。彼女は母親にくどくど言い聞かせていました。「お母さんはね、びっくりするくらい筋肉がどんどん衰えているの。(寝てばかりじゃ当たり前!)家に帰ったら、前のように勝手にヘルパーさんに電話したりしないでね。保険も変わるし、お金がかかりすぎて、妹のA子もすごく困っているんだから」

あとで、その老婦人が看護師につくづくと言っていました。「娘がこの世で一番怖いよ」

そして、同じ病室の人も知らない間にひっそりと、彼女のベッドが空になっていました。

それと対照的な母子にも会いました。

リハビリ病棟では全員食堂で食事をします。ある日、91才という痴呆のおばあさんが新顔で入ってきました。介護福祉士さんがスプーンを持ってやさしく、「おいしそうですよ。ちよつと食べてみましょうね」と促しても、おばあさんは口を開こうとしません。

そこへ、茶髪で小太りのおばさんが飛び込んできました。おばあさんの側でんと腰をおろし、「口あけて、あくん！」と赤ちゃんにでも食べさせるように言いました。娘でなければできないことです。おばあさんがいやいやをすると、「だめ！ 食べんくちやあ治らんすけ、あくん、あくん！」おばあさんはしぶしぶ口を開けました。おばあさんはすかさず、そこへするりとどろどろ食を流し込みます。

おばあさんの元気な声が、しんとしてお通夜のような食堂の雰囲気を変えてくれました。彼女は病院へ朝昼晩と通って母親に食べさせていました。

たまたま彼女とエスカレータの前で会ったので、わたしは「すごいですね。おかげで食堂が明るくなりま

「したよ」と言いました。すると、彼女は、「中学生と高校生の3人の孫にも食べさせているから、一日があつという間に過ぎちゃうの」「すごい！」

「ばあちゃんは78才から病気が出たの。この前、吐いたので救急車で運ばれたのだけれど、夜おしっこしようとして、ベッドの柵を越えて落つこちて腰を骨折しちゃった。わたしは一人娘だけ、全部自分でやらんくちやあならんのだわ」

うちは兄と妹の3人交代でなんとかやりくりしていますが、一人だつたらとづくにぶつ倒れています。

わたしは彼女と会うとお喋りするようになりまして。彼女の住まいはわたしの実家とそう遠くない場所です。まわりに一人暮らしが多いとのことだから、できるだけ茶飲み会とかやって独り者が引きこもらないようにしているそうです。

その彼女も、「市の施設が空いたから、ばあちゃんはそこにはいってもらうの」と言っていました。痴呆が進んだ親を自宅で介護するのは、想像以上のものがあると感じました。

母は入院してから1ヶ月たち、リハビリにすぐがんばるようにになりました。

まわりの患者さんたちが反面教師になっているのだとも思います。患者さんたちは重い脳梗塞や痴呆の人がほとんどです。訪ねてくる家族も少なく、患者さんたちは黙って彼岸を見ているような眼差しです。はつきり言って、食事が全然楽しくないです。

母は、「ここに、長居したくない」としきりに言い、嫌いなお茶も自分から飲むようになりました。妹やわたしは、「水分を取らないと、もっと重い脳梗塞が起ころよ」と口癖のように言ってきたからです。

今回の入院騒ぎで感じたのは、病棟の看護師長によって雰囲気はかなり違うということです。

まず、リハビリ病棟に移ってきたとき、雰囲気暗いなと思いました。病棟そのものは新しくきれいなのに、リハビリ病棟の看護師長は管理的でした。

母が寝る前おしっこする時、看護師さんに来てもらった時の「ほっぺた突つかれ事件？」を、看護師長に言いに行きました。同じようなことが病棟でまた起こったら困ると思つたからです。けれど、看護師長はこう言いました。

「当番はB看護師ですが、やってないと言ってます。事実かどうか、本人を連れてお母さんに確認してもらいましょう」

わたしは個人名を聞きたかつたわけでもないし、やつたやらないの犯人探しをしたかつたわけではなかつたので困りました。

看護師長はそれ以上にべもない態度だつたので、仕方なく、母にそのことを言うと、母はすぐ切ない顔をして、「もうそのことはいいい。別の看護フさんがあやまつてくれたし、過ぎたことだから。これからお世話になるのだし」と言いました。

そのことを、看護師長に告げると、彼女は「でも、これから指導しなくてはならないからはずきりさせなくちゃあいけない」と強行です。わたしは、「91才の脳梗塞をおこした年寄りにそういうことしないでください。わたしにとつてたつた一人しかいない親ですから。母親に何かあつたら、どうされますか？」と厳しく言いました。

すると、彼女は「わたしが責任取ります」ですつて。ふだん、病室に来たこともない看護師長に、警察官のように取り調べられ、母がノイローゼになったり、ストレスでまた脳梗塞でも起こしたら大変。責任なん

か取れつこないよ。だから、「とにかくきょうはやらないでくださいね。母が切ながつていますから。あとで話しかけるにしても、さりげなくやつてくださいよ」と繰り返す言いました。

翌日、わたしは「もしもし院長」の用紙に、『貴院のおかげで母が信じられないほど回復してきたこと』について具体的な親切例を書いたお札の手紙を、総務課に届けました。その後、看護師長は母に「事件」のことは問わなかつたようです。

はじめに入院した東病棟の看護師長は、よく病室を回って来まして。耳の遠い母に顔を近づけてはつきりとした声でよく話しかけてくれました。

リハビリ病棟に移り、わたしが母の気分転換やリハビリのため、母を車椅子の乗せ、東病棟まで散歩に行つた時、彼女に会うと必ず声をかけてくれました。桜を見に病院の駐車場まで行つた時は、彼女も2台の車椅子を押し男性のお花見の手助けをしていました。デジカメでわたしたちの写真も撮ってくれ、散歩から帰ると、もうプリントした3枚の写真を枕元に届けてくれてありました。

## 混沌市凡日録 十四

## ウイリアム・ウイリアムスン

蒲原直樹

電話の声を聞いたときに、鞠村滝雄は変な感じがした。それがなぜだったのか、ひと気のない混沌市影絵公園で相手の男と会ったときにわかった。

「あなた、誰だ？」

マスクとサングラスを外した男の顔は、自分に瓜二つだった。声も自分にそっくりだった。だから不思議な気持ちになったわけだ。しかし自分の色あせた服に比べると男の背広も靴も段違いの高級品だった。「探偵の調査によると、われわれは遠い親戚にあたるそうだ」

男は言った。

「しかしそんなことはどうでもいい、あなたに頼みたいことがある」

「……」

鞠村滝雄は露骨に警戒の色を見せた。同じ顔の中年男が二人、それを利用してとなれば犯罪のアリバイ作りとか、ろくな頼みではないだろう。「謝礼として三百万用意している。」

こちらも探偵が調査したんだが、あなた、サラ金に借金がある、そうだろう？」

借金だけではない、鞠村滝雄は踏み倒しや詐欺まがいまでやり、妻子にも逃げられていた。封緘のしてある手の切れそうな新札の束を見せられて、滝雄の脳みそはたちまちぐちゃぐちゃに溶けた。

男の依頼は数日間男になりすまし、混沌市影絵町の男の自宅で過ごすことだった。その間に男はるくでもないことをやるつもりだろう。しかしそれは鞠村滝雄の知ったことではなかった。彼は男に貰ったイタリアン・カジュアルに身を包み、男のスーパーデン車サーブで邸宅の門をくぐった。

彼に話しかける人間はいないはずだった。妻との仲は冷え切り、会話はない。使用人たちは男に干渉しない。老犬がいて、朝晩は散歩させることになっていた。それが最大の間

題だった。男のアリバイはそこで作られる。隣人たちに適度に姿を見せなければならなかった。決まったコースがあり、犬友達も何人かいた。彼らの名前を知る必要はなかったが、犬の名前は覚える必要があった。滝雄はポケットの写真を確かめた。

夕食になった。この家には団欒というものはなく、めいめいの部屋に食事が運ばれた。滝雄のベッドサイドに並べられた料理は、一見質素な和食だったが素材がまったく違った。煮物も焼き物も上質で、滝雄は陶然となった。ホームバーには各国の蒸留酒や醸造酒が山のようにあり、ワインセラーには年代物のボトルが並んでいた。(おとぎ話の魔法の家みてえだなあ)滝雄はすっかり芝居を忘れて感動するのだった。彼は数日間を夢のように過ごした。

「あなた、ちよつといいかしら」

四日目の夜だった。滝雄がベッドでビールを飲んでいると来るはずのない妻が部屋に入ってきて来た。彼はう

ろたえた。

「前に話した別居のことだけ……それもいいかな、なんて思えてきたの。このまま、あなたの重荷になっているのは辛いしね」

「……」

「いきなり離婚というわけにはいかないけど、私も自分の人生を歩かないといけないんだと思えてきて。それに向けて心の準備だけでも始めようと思うの」

妻は淡々とした口調で話していたが、その細面には一筋、二筋の涙が流れていた。年齢は四十台そこそこだろうか。先妻に早く死に別れた男が、会社の秘書だった彼女を後妻に迎えたらしい。名の知れたお嬢様学校を出て英国留学した才媛だという。白磁のような肌に触れば折れそうな細い手足を持っていた。巨乳好きならいざしらず、滝雄はオヤジの保護本能をくすぐるこんな女に弱かった。「なにを言うんだい君は、わたしはそんなつもりはない、離婚なんて考

えないでくれ」

滝雄は「口をきくな」と注意されていたにもかかわらず夢中で答えた。妻は目を見張った。

「あなた、本当ですか？……ずっと冷たくされていると思ってた……」

妻の目から前にもまして大粒の涙がこぼれ落ちた。

「いままで心配かけてすまなかった、これからは君を泣かせるようなことはしない、誓うよ」

「あなた……」

妻は手の甲でぐいっと涙をぬぐい、微笑んだ。

「自分の耳が信じられないわ。そういえば、あなた、変わったみたい……」

つぶらな目で見つめられ、滝雄の背中が冷や汗だらけになった。

「でも悪くないわね。自信家で野蛮なあなたより、ちよっと弱気なあなたの方が私は好きよ」

彼らは互いに固く抱き合った。

たからだ。

滝雄と妻は新婚夫婦のように毎日いっしょに風呂に入った。スポンジに石鹸をつけてきやしやな手足を洗ってやる。その泡をシャワーで流す。妻も同じ事をする。そして暗くしたジャグジーに浮かんだり、抱き合っ

て天窓から星を眺めたりするのだ。その間中、ずっと二人は笑っていた。滝雄は人生ってこんなに楽しいものだったんだ、と今さらながら思った。

次の一週間が過ぎ去ろうとしていた週末、ジャグジーで男の妻を抱きかかえながら滝雄はため息をついた。

「どうしたの？」妻は尋ねた。「なんでもないさ……でも、もうこの生活も終わりかもしれない」

「だったら、殺してくれる？」突然の言葉に滝雄は湯船に沈みそ

うになった。細い手足が太った滝雄の体を支えた。

「わかってるの、あなたは別人ね？……夫はこんなに優しくないから、すぐ気が付いたわ。どうせあの人の

アリバイ作りに雇われたんでしょ？」

妻は滝雄の体に小さな乳房と薄い陰毛をこすりつけながらささやいた。

「ねえ、私はあの人よりあなたの方がいい、ずっとあなたと暮らしたい

の。あなたも私が好きならあいつをどうかして」

滝雄は畏に陥ちた気がした。恐ろしい悪夢のような畏だったが、同時に甘美で痺れるような畏でもあった。(どうやってあの男を消すのか?)

滝雄は一生懸命考えた。

計画は全てうまくいった。滝雄にそっくりの男は妻に睡眠薬入りのウイスキーを飲まされ、ぐっすり眠っていたところを滝雄が首にロープをかけてくびり殺した。自分にそっくりの男を殺す時、滝雄の頭にE・A・ポーの『影を殺した男』が浮かんだ。

真夜中、サーブのトランクに男を詰め、混沌市日陰町の自宅に帰った滝雄は、男を寝室の梁に吊るして自殺に見せかけた。彼と同じ顔をして、彼の服を着て、彼の免許証を持つて

いる男が鞆村滝雄でないなど信じられる者は誰もいなかった。部屋中に散らばったサラ金の督促状は自殺のなによりの証明だった。

こうして滝雄と妻はハッピーエントドを迎えた。

彼らの幸福にちよっぴり陰を差したのはある新聞記事だった。

『札幌のホテルで富豪の夫人何者かに刺殺される』

そこに男の妻の名前が書いてあり、添えられていた写真は太った厚化粧の女で、妻とは似ても似つかなかった。

「どういことだ？」滝雄は妻に聞いた。

「どうと言われても……」妻はあっけらかんとしていた。

「それは私の腹違いの姉よ、そう、本物の妻。私はただの居候兼愛人。そして姉を殺したのは夫よ。そのアリバイを作ってくれたのはあなた……」

「……みんな君の筋書きか！」

「まあね、駅前場の外馬券売り場であな

たを見つけたのは私。シナリオを書いて、義兄に実行を迫ったのも私よ。みんなうまくいって、みんな幸せになった。それでいいじゃない？」

「死んだものが幸せかどうか、誰にもわからんと思うがね」

その夜のジャグジーの天窓には、赤いいびつな月がかかっていた。滝雄はそれを眺めながら、

(今夜は眠れないかもしれない……いやこれから先ずっと)

と思った。

(5) 男から七日目に連絡が来た。メッセージジャーボーイが持ってきた連絡先に電話すると、男が出て「もう一週間延びた」と言った。滝雄は飛び上がったいほど嬉しかった。快適な暮らしと男の妻を手放したくなかつ

## 畑 (一)

中井 豊

春には近所にある野道を歩きたく  
なることがある。寒さに身を縮めて  
過ごす冬には何事に対しても消極的  
になってしまっていたのが、陽気と  
共に変化し、意欲的になる。進学・  
就職の時期として春になると新しい  
ことに向かう習慣が身につけている  
のかも知れない。

昨春、狭い谷筋の田畑に囲まれた  
一本の道を何気なく歩いてきた。軽  
四輪が入れる程の道幅の、貯水ダム  
へ行く地道である。

畦道で農作業中の年輩の人を見か  
け、ふと声を掛けてみた。

「この辺はイノシシが荒らしに來ま  
せんか？」

「来る来る」

「ゴム長を穿いた農夫が近づいて  
來ながら言った。

「庭木に牛糞をやりたいけど、手に  
入りますかね？」

「近くの牛舎へ行けば、軽四一台で

五〇〇円や」

と言いながら、畑の片隅を指して、  
「こんなに雨に晒してからやらんと  
塩分でアカンぞ」

「成程。簡単に撒けばエエというも  
んではないんですね」

「そらそや」

一呼吸おいて、

「こんな季節に畑仕事は楽しいでし  
ょうね」

「マア、金にはならんが、気兼ねの  
要らん楽しみや」

「自然相手の贅沢な楽しみですね」

「そういうこつちや」

思いついて、

「庭に糞を入れたいと思っても、素  
人には中々手に入らないし……」

と調べてみた。

「とつてあるから、やるよ」

思いがけない返事。

「この辺で貸してもらえるような畑  
はないもんですか？」

「あるよ」

無造作な返答だった。この人は土  
地の生え抜きで、その畑は知人から  
借りているとのことだった。利用で  
きる人に遊休地を耕してもらうこと  
は地主の希望でもある由だった。

こうして、このYさんと連絡先を  
交換した上、細かくきざんだ糞を一  
袋もらい、それを背負って家に帰っ  
た。全く予期しない出来事だった。

数日後、  
「話をしといた。一度うち合わせし  
よう」

と、Yさんから電話が入った。こ  
うして、思いがけず、Mさんの畑の  
一部(四〇坪くらい?)をYさんの  
紹介で借り、農作業を始めることにな  
った。登山に代わる運動が見つか  
ったのである。Nさんも一緒だった。

「何せ、生まれて初めてのことで…  
…」

と言いながら、Mさん、Nさん、  
Yさんに尋ね、やることを真似て、  
四月には、

水ナス、キュウリ、ミニトマト、  
長トウガラシ

を、五月には、  
カボチャ、トマト、トウモロコシ、  
オクラ、枝豆、インゲン豆

などを植えた。ほとんど接ぎ木

した苗を買った。接ぎ木したものは  
病気などに強いということだった。  
トウモロコシとオクラと枝豆とイン  
ゲン豆は種を播いた。スイカも勧め  
られたが、難しそうに思えたので、  
これは植えなかった。

知り合いに、植える前に苦土石灰  
というものを撒き、堆肥を畑に鋤込  
むよう、そして水やりと草引きを欠  
かさないう助言された。それで、  
苦土石灰や樹皮堆肥を農協に買いに  
行き、窓口の人にも挨拶した。Nさ  
んが、

「これを使いな」

と言って、FRPの古い浴槽を畑  
の傍らに置いてくれた。畦に据えつ  
けて水を貯めるためだ。Mさんは、  
「鍬やスコップは買わんでも、畑に  
あるものを使ったらエエ」

と言ってくれた。

時折、MさんやNさんに、あれを  
植えたらどうか、これも植えろ、と  
教えられた。Yさんも通りすがりに  
様子を見ていて、必要な杭や竹や藁  
を置いて行つた。

言われた通りにしているうち、気  
のせいかな、苗は大きく育つてゆくよ  
うだった。さらに、一緒に作業して  
いるYさんが、  
「これも植えとき」

とサツマイモの苗を五本分けてくれたので、これも植えた。しばらくして、Nさんに、

「肥料をやらなアカンぞ」

と言われたので、有機総合肥料と  
いうのを施した。

六月になると、立派なキュウリや水ナスが収穫できた。急にどんだん取れるようになった。米糠を買ってきて、糠漬けにした。驚くほど美味しく出来た。友人が来ると畑へ案内し、作物を持ち帰ってもらった。

暑い夏には、ミニトマト、トウモロコシ、オクラが実った。鳥除けのナイロン糸を張ったりしたこと、汗ビツシヨリの作業で帰りが暗くなり、近くの小川で蛍の飛ぶのが見えたことも思い出される。

インゲン豆は時期が短かった。枝豆は初めに播いたのはよかったものの、後ののはカメ虫がついて駄目だった。

前から、トウモロコシは、

「とって直ぐ蒸すと美味しい」

と聞いていたので、そうした。

サツマイモは伸びた蔓を切って増やしていった。サツマイモは持ち重りがし、友人たちにプレゼントすると好評だった。

## シューマン作曲「予言の鳥」 滝本文彦

高校三年生になった頃だったろうか、家の庭にある五右衛門風呂の釜に、新聞紙を丸めて突つ込み、上に細い木を乗せてマッチで新聞紙に火を点けた。細い木に火が燃え移る。太い薪をくべる。細長い竹筒を吹いて空気を送り込む。煙が出る。涙が出る。夕暮れ時、これが僕の日課になっていた。

薪をくべながら、「夕べの音楽」というラジオ番組を聴くのが楽しみだった。ある日の夕暮れ、音楽評論家が言った。

——シューマン作曲『森の情景』から、第七番「予言の鳥」をお送ります。ピアノはクララ・ハスキルです。

僕はその「予言の鳥」という曲名を聴き、息を凝らした。曲名が神秘的だったからだ。

「予言の鳥」は、不思議な分散和音の連続だった。ポーンポロン、という形の分散和音が終始一貫鳴り

響く、曲名どおりの神秘的な和声の列なり——僕は或るイメージを思い浮かべた。

深く暗い森、太い樹木をぬうように黄金の尾の長い鳥が羽音もたてず、左から右の方向へ飛び去る。去った後に彗星の尾のように薄い金粉が飛び去った鳥の軌跡を描いている……。

クララ・ハスキルの演奏を聴きながら、暗く不安で不気味な感情を抱いた。しかし、遙か彼方に幽（かす）かな光が見える。暗く不安で不気味ではあるが、絶望的な音楽ではなかった。微（かす）かな希望の光が遠くに見えた。

僕の思い描いた深い森の中を羽音もたてず飛び去った黄金の尾の長い鳥——これは「予言の鳥」という曲名に触発されたイメージだが、数学の岡潔先生が言う《実にきれいな黄金の鳥が突然大脳前頭葉のスクリーンに現れたシューマンの音楽》なのだろうか。

僕は「予言の鳥」の楽譜を見たくなった。新宮市の福田楽器店（本店は福田時計店）へ、「予言の鳥」の楽譜を買いに行った。家のある古座から新宮市へは汽車に乗って一時間半だった。

ピアノ・ピース（楽譜）は見つからなかった。『森の情景』という曲集も見当たらなかった。

その後、いつ買ったか、高校生活も終わりの頃だったか、福田楽器店で「予言の鳥」のピアノ・ピースを見つけて買った。一〇〇円だった。思い描いていたとおりの楽譜だった。

この曲はシューマンの好むドイツ・ロマン派の文学者アイヒェンドルフの『森のロマン性』をもとにして生まれたものだと言われている。

「森のロマン」には、シューマンばかりでなく、一般的ドイツ人も憧れているのであって、この曲集『森の情景』はドイツの作曲家の手からでなければ生まれてこない作品だと思う。ロマン的であっても、シューマンの若い頃のような詩的情熱、熱狂的なリズムはない。ここには静かな瞑想、客観的な音楽がある。

『森の情景』は次の九曲の小品か

らなっている。

- 第一曲 「森の入口」
- 第二曲 「待ち伏せる狩人」
- 第三曲 「寂しい光」
- 第四曲 「気味の悪い場所」
- 第五曲 「なつかしい風景」
- 第六曲 「宿屋」
- 第七曲 「予言の鳥」
- 第八曲 「狩りの歌」
- 第九曲 「別れ」

この『森の情景』という標題をもつピアノ小品集の各曲の冒頭には、初め短い詩が書かれていたが、シューマンは出版に際して第四曲以外の詩を除いてしまった。曲のイメージを、もっと自由にさせたかったからだろうか。

その第四曲「気味の悪い場所」には、北ドイツの詩人ヘッベルによる詩が書かれている。

花々は、いかに高くのびても  
 ここでは死の如く蒼白い  
 ただその真中の一輪の花のみが  
 そこでくすんだ赤い色で立っている  
 それは陽の光さえ受けたことがない  
 この花の色は大地によるものなのだ  
 その大地は人間の血を吸ったものなのだ

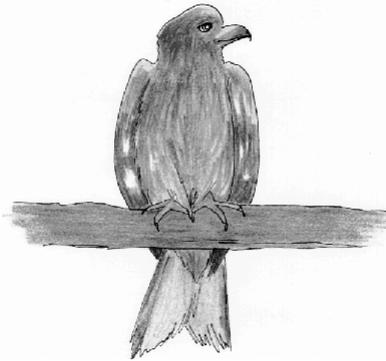
第七曲「予言の鳥」はト短調である。ポーンポロンという音形——ポロロンはト短調のトニックD、G、Bフラットの、ごく当たり前な分散和音であるが、最初のポーンはCシヤープだ。トニックの主音に対して減五度——この減五度が不安定で不気味な感情を喚起するのだろうか。

このポーンポロンが2オクターヴに渡って高音部に向かって駆け上がる。次は、ごく当たり前のサブドミナントの分散和音だ。分散和音の前に装飾音（前打音）が付き、ポロロンポロンと弾いてCシヤープの音に行き、ポーンポロンと弾く。このような音形が転調しながら延々と続く。何というアイディアだろう。何と神秘的なハーモニーの連鎖だろう。シューマンらしさが躍如としている。

軽やかで微妙なタッチで弾かなければ、クララ・ハスキルのような神秘的な演奏にはなるまい。

この楽譜を買って家に着くと、下駄を穿いてピアノに向かった。下駄は足の裏に心地よく、下駄の前歯は梃子（てこ）の原理でペダルを踏みやすかった。そして、クララ・ハスキルの「予言の鳥」をイメージして

弾き始めた。しかし、『神秘的』とは程遠い、金槌で釘を打っているような、鉄工所のような音がした。譜面には『ゆるやかに、きわめて柔らかに』と書かれていた。



(3ページよりつづき)

親切な看護師さんにもたくさん出会いました。意地が悪いという人はいなかったけれど、機械的だなあと、思う看護師さんはいました。けれど、一月以上もたつと、どの看護師さんも、それぞれの個性で一所懸命やっているのだなあと、思うようになりました。けれど、上に立つ人の姿勢は当然ながら病棟全体の雰囲気大きく影響していきますね。

いろいろありましたけれど、お蔭様で、母は信じられないほど回復しています。

2人の介護福祉さんが母と家に出張してきてくれて、とてもいいに家の改善点を調べてくれました。トイレやベッドの手すりの高さを測ったりして。畑も見てくださいました。母はさっそくトウタチの菜を摘んだそうです。

業者に注文した手すりなどが用意できたら、母は退院です。畑のトウタチ（菜の花）がほころびて待っていてくれることでしょう。

# 遙かなる戦火

内田幸彦

## (一四) 簡閲点呼

義務を負わせたのである。

一九四四年(昭和19)十月、日本軍はテニヤン島で八千人、グアム島で一万八千人が玉砕。戦艦武蔵をはじめ、連合艦隊も全滅していた。しかし、大本営は一部のみを新聞に小さく報じただけで、国民は連合艦隊の全滅など夢にも思っていない、日本軍の勝利を信じていた。

紙資源の涸渇で、当時の新聞はタブロイド版——今の新聞紙一頁の半分を二つ折りにした小型のものであった。

敗色濃くなった戦況に動じた軍部は『兵役法施行規則』を改正し、満一七歳以上の男子は現役兵に編入することを決め、徴兵検査に代わる「簡閲点呼」を実施した。平たく言えば、兵隊検査を簡略にしたもので、これが済んだ者に現役兵と同じく入隊の

この年の十一月、朝夕は寒く感じられる或る日、私も簡閲点呼に呼ばされた。

小学校の校庭中央に布テントが張られ、まん中で椅子に掛け、サーベルに両手を載せ、身体検査や体力テストを受ける青少年をふんぞり返って眺めているのが責任者である。肩章は大尉で、牛革の長靴は輝き、着古した軍服は軍での経歴の長さを示すように威厳に満ちていた。

点呼の実務には兵長、伍長、軍曹どまりの下士官がキビキビと当たっていた。

私の番が廻ってきた。身長、体重を測り、記録されると、運動場を三回、駆け足で周り、所要時間を報告した。

次は土嚢上げだった。ドンゴロス

の袋に入った土嚢を何回、頭の上まで差し上げられるかである。椅子に腰掛ける伍長の前に出ると、上気し、緊張で硬くなった。

「掛かれッ！」

号令と共に土嚢に手を掛けたが、臍までがやつとだ。まるで地面に根を下ろしたように重く、持ち上げられない。

私は焦りと恥ずかしさで動作が宙に浮き、赤面し、冷や汗でビッシヨリになった。運悪く見回りに来たのは検査官の大尉だった。長く坐っていて退屈し、気分転換に巡回を始めたらしい。

「貴様ッ、その格好は何だッ！ 飯を食ってきたのか、日本男子がその態(さま)でどうするッ！」

大きなダミ声が飛んで来た。怒鳴られ、逆上した私は土嚢を持ち上げようとしたが、逆に手足に力が入らず、見られた姿でないに違いない。そう思うと一層、動揺と焦燥で動作がぎこちなくなる。

「不甲斐ない奴ッ！」

と検査官は怒ったまま他の検査場へ立ち去った。私はホッとした。

朝も昼も豆飯か代用食。米の御飯

など口には入らない。お粥も米粒は一〇%くらいで、あとは重湯ばかりだったから、力が出る筈がない。叱られた口惜しさに、

「力が出る程、主食を配給しているのかッ！」

と怒鳴りたかった。判定は第二乙種だった。最低が丙種だから、ビリから二番目の下位だった。

検査の終わりに、解散の訓辞があり、大尉は言った。

「今日の簡閲点呼で、従来からの兵隊検査を受けたことになり、立派な帝国軍人であるッ！ 何時召されても支障のないよう、益々健康を計り、待機して欲しい」

帰途、私は考えた。これで何時、入隊してもおかしくない状態になった。矢張り、一人の母が気になり、心が重くなった。こればかりはどうしようもない。《その時はその時》と運を天に任せる他はなく、思わず大きな溜息を呑み込んだ。

## 青い波濤と白い龍

第一回

藤川博樹

## ■序奏・梁山泊

夜が明けようとしていた。無家の話は問はず語りに始まり、いつ果てるともなく続いていきそうであった。

無家常三(むのやつねぞう)は、昨夜、本郷にある学生寮の石川の部屋に転がり込み、当座の間片隅に眠るところを貸してくれるように頼んだ。石川は行くところのない常三の頼みを無下にことわるわけにもいかず、汚れた布団を引っ張りだして四畳半のたたみの部屋の中央に敷いた。

「何か食べるか？」

「いや、森川食堂で一番安い焼きそばを食べてきた」と常三は答え、うそそうとした身振りで石川の布団に潜り、身を縮めた。

石川は、九州の進学校を卒業して東京の大学に受かったが、学園の中の嵐に飲み込まれて二年留年し、すでに五年在籍しているが、卒業までにはまだ半年あまりが残っていた。

常三が眠れないのは、人の布団を借りているからではなく、またその布団が垢じみてあまり立派でないからでもなく、食べたばかりの焼きそ

ばの悪い油で胸焼けしているからでもないようであった。ましてや、常三をこの道に誘い込んだのは石川であつたが、石川が今普通の学生として卒業を控えているのに、自分がこれから多大な荷物を背負って困難な道を歩かねばならない事態を恨んでいるからでもなかつた。

常三の中にはたくさんの印象が渦巻いていて、その印象の数々を言葉にして外に向かつて流し出していかなければ、その渦は収まりそうになく、渦の遠心力も弱まりそうもなかつた。

「代々木駅前のお喫茶店に呼び出されてなあ」

「あの、パチンコ屋の隣の、予備校の向かいだな」石川は、答えながらラジオのスイッチを入れた。常三がすぐには眠りそうになく、長い話を聞くための準備を始めるといっわけでもなかつたし、ラジオの音楽でも聞けば、高ぶつた常三の興奮も収まるのではないかと期待したからでもなかつたが、ふと石川がスイッチを入れたラジオのスピーカーから、ブルックナーの交響曲の序奏が流れた

した。交響曲九番の序奏は、何事か始まりそうで、何事もおこらず、もやもやとおごそかに、そして不安定に開始し、聞くものの心を宙に浮かせたまま置き去りにした。

「のし若がいた」

「若か」

「そう、小若でなく、のし若。のし若が怖い顔して、『これは上級機関の決定である』と言うんだ。少し考えさせてくれと答えると・・・」

「決定的であると」

「そう、のし若の口ぐせだな。これは君の人生にとって決定的なことであるとと言われて、何もいえなくなつてしまつて」

「それで、フタキ旅館か」

「そう、フタキ旅館の会議に参加して、もう大学へは出れない。出る暇が無い」

常三は、本郷三丁目の駅で地下鉄を降りると、指定された旅館へ向かつた。

本郷通りから路地を少し行つたところで旅館を捜し当て、指定された会議室に行くと、他の大学からもたくさんの学生が集まつていた。

委員長がそれぞれの大学から集まつた二〇人ほどの学生を紹介したあ

と、上の組織から来た指導者が二人紹介され発言した。

猪熊という小太りで背の低い学生担当という男は、若いのか年取っているのか分かりにくい雰囲気を持っていて、肌の艶はいいのだがやや脂ぎった顔色をし、太つて下腹が出、妙に落ち着いて自信に満ちていた。他の者が発言している間、ノートの手端をちぎっては口に入れてかんでいた。会議中、たばこが吸えないので、紙をちぎって口に含む動作を繰り返すうちに癖になつたのだ。この癖は、信奉者と亜流を生み、物真似はへつらいのしるしとなつた。

「かつてレーニンには、スイスにおける青年同盟における記念集会で、『私は生きて革命を見ることはないだろう。しかし君たちは革命が成就された時代に生きるだろう』と演説した。レーニンの演説や、アジテーションのために書かれたビラの煽動文、目前の論的を打ち破るために書かれた数々の論文は、いつも現実的でないいきいきとして文学的で、青年たちを駆り立てる喚起力に満ちていた。青年たちは感動して涙を流した。

ロシア革命が起きてレーニンがロシアに戻つたのはそれから数カ月後のことである」(以下次号)